
九成宮醴泉銘碑拓本試論

——李鴻裔旧蔵本・端方旧蔵本を比較する——

夏 宇 継

はじめに

九成宮は唐朝宮廷の離宮である。貞観六年（632）、唐の太宗は偶然にもこの離宮の中で甘い水が湧き出るのを発見し、これを一大祥瑞として、すぐに記念碑の建立を命じた。撰文には魏徵がその任に当たり、碑文は欧陽詢が筆を執った。碑石は各行50字で24行に区画され、銘文は全部で1108字、上部に2行6字の「九成宮醴泉銘」と浮き彫りにされた篆額がある。

『九成宮醴泉銘』は、古来「楷書の極則」とされる名品であり、この原碑は今でも陝西省麟游県にある九成宮跡に保存されている。この碑については、本論文で比較検討する李鴻裔¹⁾旧蔵本と端方²⁾旧蔵本を含めて頗る多くの拓本が世に伝えられ、多年来、それらの真偽、良否、時代の前後について多くの研究がなされてきた。日本においても書道界の権威、表立雲先生らが多くのすぐれた研究成果を発表されている。私の恩師米齡甫先生も、中国において五十年来この研究に携わってきた専門家の一人である。この十余年来、私も米先生のご指導のもとに研究を重ね、独自の見解を持つに至ったので、この機会にその成果を世に問い、恩師に対する感謝の意としたい。私たちの研究は、これまでの伝統的な研究方法と異なる新しい角度からなされたもので、この

成果を世に問うことにより、さらなる研究の発展と中日間の学術交流がより促進されることを願って止まない。同時に日中の諸先輩方のご叱正をいただければ幸いである。

『九成宮醴泉銘』の拓本は多く、原碑の拓本もあれば、翻刻によるものもある。これらには取られた時代の前後によるちがいがあがるが、それを弁別するのは難しいことではない。多くの拓本を仔細に研究、対比し、そこから得られた材料によって結論を出すことは可能だ。もちろん、対比しても十分な材料を得られず、結論を導くことができないこともある。

さて、日本の二玄社から李鴻裔旧蔵本と端方旧蔵本の『九成宮醴泉銘』拓本が出版されているが、この二つを対比してみよう。

1 石花（拓本の文字以外にある白い斑や裂け目）による対比

この二つの拓本には、多くの文字そのものや文字の周囲に、少なからぬ大小の石花がある。大きな石花は文字の筆画を傷め、小さなものは粟の如く、細い糸の如く、薄い霧の如く、軽い雲の如く存在する。この二つの拓本の石花はひとつひとつ対応しており、もし同一の石碑から取ったものでなければ、このように合致しているはずがない。さらに、この二つの拓本には、それぞれ異なる場所に、描墨したため石花が消失した箇所がある。たとえば、李鴻裔旧蔵本では、「不能尙也」の「也」は描墨されたためにその付近の石花が消え、「也」自体も欧陽詢の筆意を失ってしまったが、描墨が濃くないので石花はかすかに見える。

ここで、二つの拓本の各頁の石花を一字ごとに対比し、その結果を表1にあらわす。方法としては、端方旧蔵本の4～39頁までの36頁につき、両拓本いずれにもある石花を統計した。その結果、両拓本いずれにもある石花は482カ所であることがわかった。大きな横の亀裂および破損された筆画の石花は

表1 李鴻裔旧蔵本・端方旧蔵本に共通して存在する石花の数

端本頁	石花数	石花のある文字と石花の数
4	11	成 ₃ 宮 ₁ 書 ₁ 監 ₂ 鹿 ₂ 臣 ₁ 徵 ₁
5	12	維 ₁ 月 ₂ 帝 ₁ 暑 ₁ 成 ₁ 之 ₁ 冠 ₂ 殿 ₂ 絶 ₁
6	7	壑 ₁ 高 ₂ 廊 ₂ 樹 ₁ 差 ₁
7	15	交 ₁ 金 ₂ 碧 ₃ 相 ₂ 照 ₂ (小さな点) 蔽 ₂ 虧 ₁ 移 ₂
8	15	泰 ₂ 人 ₄ 從 ₁ 良 ₁ 足 ₂ 徐 ₂ 動 ₂ 涼 ₁
9	13	安 ₁ 體 ₁ 之 ₁ 養 ₁ 漢 ₃ 皇 ₂ 爰 ₂ 在 ₂
10	7	始 ₁ 終 ₁ 人 ₂ 青 ₁ 南 ₂
11	15	奉 ₃ 重 ₂ 譯 ₁ 輪 ₂ 臺 ₁ 北 ₁ 地 ₂ 縣 ₃
12	10	靈 ₃ 貺 ₁ 畢 ₁ 臻 ₁ 儀 ₁ 之 ₁ 資 ₁ 風 ₁
13	7	爲 ₁ 勞 ₃ 成 ₁ 滯 ₁ 室 ₁
14	15	暑 ₁ 群 ₃ 請 ₁ 離 ₁ 宮 ₁ 庶と可の間 ₂ (すばらしい!) 性の下 ₂ 上 ₁ 力 ₁ 深の下 ₂
15	13	爲 ₁ 於 ₁ 曩 ₂ 棄 ₁ 毀 ₁ 則 ₂ 事 ₁ 因 ₂ 何 ₁ 必 ₁
16	12	於 ₁ 斲 ₁ 爲 ₁ 樸 ₂ 損之又損 ₄ 壞 ₁ 閒 ₁ 粉 ₁
17	25	茅 ₄ 茨 ₁ 於 ₂ 瓊 ₁ 觀一鑿 ₁₀ 於一所 ₇
18	10	大 ₁ 竭 ₁ 其 ₁ 池 ₁ 谷 ₁ 城 ₃ 之 ₁ 内 ₁
19	20	この頁には20余あり、具体的には述べない。そのうち「本・乏・水」三文字の周囲の石花は重要である。これのないものは翻刻である。
20	15	中 ₁ 宮 ₁ 西 ₁ 之 ₅ 陰 ₃ 踏 ₁ 閣 ₂ 厥 ₁
21	19	有 ₁ 潤 ₁ 而 ₄ 以 ₂ 杖 ₂ 出 ₁ 乃 ₁ 引 ₁ 爲 ₁ 鏡 ₂ 味 ₃
22	17	右 ₁ 東 ₂ 雙 ₂ 闕 ₁ 穿 ₂ 青 ₁ 縈 ₃ 帶 ₁ 紫 ₁ (小さな点がたくさんある) 清 ₁ 波 ₁ 蕩 ₁
23	11	可 ₁ 心 ₁ 形 ₁ 竭 ₃ 將 ₁ 常 ₁ 匪 ₁ 乾 ₂
24	9	蓋 ₃ 靈 ₂ 案 ₁ 功 ₂ 醴 ₁
25	18	闕 ₃ 庭 ₁ 冠 ₃ 子 ₁ 太 ₁ 寧 ₁ 中 ₁ 靈 ₂ 醴 ₁ 泉 ₁ 出 ₁ 應 ₁ 者 ₁
26	14	純 ₁ 飲 ₁ 貢 ₄ 醴 ₁ 壽 ₁ 年 ₅ 泉 ₁

27	11	飲 ₃ 之 ₁ 痼 ₂ 愈 ₁ 則 ₁ 神 ₁ 明 ₁ 遐 ₁
28	15	固 ₁ 撫 ₁ 有 ₃ 勿 ₂ 休 ₁ 聞 ₂ 於 ₁ 昔 ₂ 以 ₂
29	9	於 ₂ 上 ₂ 豈 ₃ 顯 ₁ 記 ₁
30	14	茲 ₁ 書 ₁ 事 ₁ 盛 ₁ 美 ₂ 遺 ₁ 策 ₁ 銘 ₂ 其 ₂ 曰 ₂
31	21	惟 ₁ 皇 ₁ 撫 ₁ 奄 ₂ 壹 ₁ 宇 ₂ 千 ₂ 載 ₁ 膺 ₂ 萬 ₁ 物 ₁ 舜 ₁ 深 ₁ 伯 ₃ 前 ₁
32	16	五 ₂ 握 ₁ 矩 ₁ 聖 ₁ 契 ₂ 開 ₂ 闢 ₂ 不 ₁ 臣 ₁ 並 ₁ 襲 ₁ 琛 ₁
33	9	陳 ₁ 不 ₂ 玄 ₁ 食 ₁ 安 ₁ 知 ₁ 帝 ₂
34	8	天 ₁ 之 ₁ 無 ₁ 萬 ₁ 物 ₁ 感 ₁ 質 ₁ 焉 ₁
35	10	雜 ₁ 繁 ₂ 祉 ₁ 雲 ₁ 圖 ₁ 呈 ₁ 頌 ₁ 輟 ₁ 筆 ₁
36	18	祥 ₁ 斯 ₂ 流 ₃ 謙 ₁ 潤 ₂ 鏡 ₄ 澈 ₁ 之 ₁ 日 ₂ 之 ₁
37	14	道 ₁ 隨 ₁ 時 ₁ 泰 ₂ 流 ₁ 后 ₁ 惕 ₁ 休 ₂ 般 ₁ 遊 ₁ 黃 ₁ 屋 ₁
38	16	其 ₁ 取 ₁ 其 ₁ 反 ₄ 本 ₂ 質 ₁ 高 ₁ 思 ₁ 滿 ₁ 戒 ₁ 在 ₁ 保 ₁
39	11	貞 ₁ 吉 ₂ 子 ₁ 率 ₁ 男 ₂ 臣 ₁ 歐 ₂ 勅 ₁
合計	482	

(説明)

1. この表は端方旧蔵本の頁の順にしたがって、一字ごとに李鴻裔旧蔵本と対照している。
2. 李鴻裔旧蔵本・端方旧蔵本いずれか一方の石花が描墨により消失している場合、この石花が他方にあっても数には入れない。ただし磨損してはいるがそれとわかるものは数に入れた。
3. 数える時、粟粒大の石花、および細い糸状の模刻しにくい小さな石花を特に重視した。
4. 筆画とつながっている石花は、翻刻の時に容易に筆画とつなげて刻めるので、この類の石花は数に入れない。

数に入れないが、糸や粟のような細かい石花はすべて入れた。

二つの拓本の石花が一致していることにより、これらの拓本は同一の石碑から取ったものであるといえる。

2 二つの拓本の取られた時代の前後について

石花の大小・隠頭，文字の筆画の細い太いを，石碑の磨損や不明瞭になるなどの変化と考え合わせれば，李鴻裔旧蔵本は端方旧蔵本より以前に取られたものであると断定できる。

はじめの「九成宮」（4頁）三文字を見ると，端方旧蔵本ではひどく不明瞭で，「成」の「戈」がすでに形にならないが，李鴻裔旧蔵本ではなお「成」は完全無欠である。

つぎに大きな亀裂を見ても，李鴻裔旧蔵本が先に取られたことがわかる。大きな亀裂の幅，その付近の文字の明瞭さを一字一字対照してみても，いずれが先かはっきり弁別できる。もちろん，「貫穿」二字の亀裂は李鴻裔旧蔵本の方が広いなど特殊な場合もあるが，これについては以下のように解釈すれば理解できる。

すなわち，22頁2行の初めにある「度於雙闕貫穿」の六文字を見ると，李鴻裔旧蔵本では「度」「雙」「闕」「貫」のいずれも一部の筆画がはっきりせず，亀裂も比較的広い。しかし，端方旧蔵本になると，石の表層が薄く研磨されて「度」「雙」「闕」「貫」の不明瞭だった表層が取り去られたので，もとの筆画がよりはっきりと拓本に現れたというわけである。だが「穿」の上部が磨損して筆画がはっきりせず，また「貫」の上部の「母」が拓本に取れているが，亀裂も李鴻裔旧蔵本より縮小している。また李鴻裔旧蔵本の「東」（22頁）は端方旧蔵本より破損が少なく，「流」（22頁）も筆画が見えるが，端方旧蔵本の「流」はすでに筆画が見えない。この点からも，李鴻裔旧蔵本は端方旧蔵本より早いと言える。

3 二つの拓本はもとの石碑から取られたものか

端方旧蔵本は、石碑大の紙で取られ、表装の時、基本的に幅は界縷の幅34～37mm、長さは界縷八つ分で細長く切られたものである。一頁は四行、幅は144mm（縁の黒い紙を除いて）である。

李鴻裔旧蔵本も石碑大の紙で取られたものであるが、切つてある幅は界縷の幅よりいくぶんせまくて34mmであり、長さは界縷七つ分で細長く切られている。一頁は四行、幅は137mm（縁を除いて）である。李鴻裔旧蔵本は、切つてある幅がいくぶんせまいが、石碑の大きな亀裂の隣り合わせた行のつながりを調べる上で不都合はない。

この二つの拓本を細かく調べ合わせると、大きな横の亀裂がつながっており、これらは同一の石碑から取られたもので、その取られた時代には前後があり、石碑大の紙で取られたと言うべきである。

二つの拓本の取られた時間的間隔は、短ければ数十年、長ければ百年ほどと推測される。もとの石碑は露天にあり、長年絶えず拓本が取られたので碑の変化が加速され、このことから二つの拓本の取られた時間的間隔は短いと判断できるが、もし碑がよく保存され、拓本をとる者も少なかったなら、百年以上だったかもしれない。

ところで、翻刻から取る拓本は、一度にいくらとってもすべて一様である。翻刻が短時間に大きく変化する可能性はなく、その拓本から、取られた時代の前後を見いだすことはできない。たとえ翻刻が数十年保存され、一、二代を経ても、風雨にさらされたり長時間にわたり拓本が取られたりしない限り、拓本上には取られた時代の前後による大きなちがいは現れない。もし翻刻が珍藏され、のちにまた拓本が取られたなら、変化はいつそう生じにくい。

翻刻された碑といえば、虞世南書の孔子廟堂碑がまるごと翻刻されて立て直されたが、九成宮醴泉銘碑にはそのような記録はない。翻刻の目的はただ

拓本を取ることにのみあるので、多くの小さな石や、ひどい場合にはレンガでもまにあう。『九成宮醴泉銘』を翻刻して拓本を取るために、もとの石碑大の石を用いる可能性は絶対になく、翻刻からの拓本にもとの石碑大の紙を用いる可能性もないというべきであろう。

李鴻裔旧蔵本と端方旧蔵本は、同じ石碑から取られ、その時代も少なからぬ年月の隔たりがあり、また石碑大の一枚の紙で取られているので、この二つの拓本はもとの石碑の原拓といえる（一枚の紙とは、貼りあわせて石碑大にしたものも含む）。

4 石碑の変化について

李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本に至る間に、もとの石碑には複雑な変化が生じた。この大きな碑の石の質は良いが、風化したからにはそれ自体が完全無欠でいられるはずがない。上部には大きな横の亀裂が生じ、下端は風砂雨雪に侵食され、より破損を受けやすくなっていた。さらに特殊な石質の弱点により損傷のある文字もある。以上のような変化は、李鴻裔旧蔵本以前にすでに発生しており、李鴻裔旧蔵本が取られる時、一部の文字はすでに表面が薄く風化し、筆画もはっきりしないところがあった。端方旧蔵本の取られた時に至り、さらにいくらかの変化が生じた。すなわち、石碑は引き続き風化し、また絶えず拓本が取られたので、石碑の表層がさらに薄く減ったのである。李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本に至る変化には、以下のようなものがある（表2を参照されたい）。

(1) 風化されて石の質がもろくなったことにより、端方旧蔵本では一部の筆画が太くなった。初めの「九成宮」三文字をはじめ、表2に指摘した各頁の箇所にもこのような部分がある。風化のほか、洗碑されたり、随意に抉剔された可能性もある。このような状況下で、拡大された石花もある。もちろん、拓本を取ったことによる磨損が、碑面が減った一般的な原因であり、主な原

表2 李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本に至る石碑の文字の変化

端本数	李鴻裔旧蔵本では細かった筆画が、端方旧蔵本では太くなっているもの	李鴻裔旧蔵本では太かった筆画が、端方旧蔵本では細くなっているもの	特別な場合
4	九成宮泉中公勅撰（注①）		魏
5	維貞觀年月帝避暑仁抗殿絶		
6	壑竦高周建參差仰		爲
7	百照灼雲	其	廻
8	極侈良至於炎景流		徐動
9	安體尙冠	誠漢甘	所地皇
10	逮乎立年人南	億兆武功終以文德	撫踰
11	重譯來王	皆獻琛淑年和	
12	二儀之功終資慮身利物	遠肅一人風沐雨	
13	京室每		堯
14	弊炎暑群下請建離宮	深閉固拒	
15	代棄之則可惜毀之因循何必改作	未肯俯從	曩
16	又損去其泰甚	於斲雜丹墀	爲
17	接於土階茅茨於訓	於	
18	享池沼咸引谷	至人無爲大聖不作。彼竭其力 (12字)	
19	本乏水源在既非人力	求不忘	
20		有六躋閣	高
21	覺有潤因而以杖之承		
22	東	南注穢可	丹帶
23	以乾象	性可常流	正神匪
24	案禮緯……則醴泉出於(23字)	之坤	蓋
25	闕冠	曰（注②）太清下及	

26	壽東觀漢記光武中	純和食貢泉元元年醴泉京師	飲獻
27	(注③)	飲之者……是以(注④)	
28	士相	百辟，固壞撝挹……以祥爲懼 (21字)	
29		實取驗於當今斯乃帝玄苻能職 在記言	上
30		茲書事不盛(注⑤)	
31	登	(注⑥)	功
32	蹈矩	五握乃聖乃神未紀冕並襲琛	契
33	大道知帝	(注⑦)	陳
34		之載無臭無聲萬類	
35	官龜圖鳳紀日含五色鳥		
36	澈用之日新挹之無		
37	竭道隨時泰慶與泉流后夕樂	居般黃屋非貴天下	
38	居高思墜……在茲永保	爲憂	
39	貞吉兼太子令臣歐詢書	率	

(説明)

1. 特別な場合とは、李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本に至り、一文字の中に太くなった筆画も細くなった筆画もある場合である。
2. 顕著な変化のない文字はこの表に入れてないが、端方旧蔵本の若干年のちには、やはり顕著な変化が現れたであろう。

(注)

- ① 撰の共部分の上の横棒が切れている。
- ② 李鴻裔旧蔵本でははっきりせず太いが、端方旧蔵本では磨損し、細く明晰になっている。この類の変化は多い。
- ③ 碑の大きな横の亀裂が広がっている。
- ④ この頁の文字すべてが細くなっている。
- ⑤ 不明瞭さが磨いて取り去られ、細くはっきりした。
- ⑥ 表の別項に該当する文字以外はすべて細くなった。
- ⑦ 表の別項に該当する文字以外はみなわずかに細くなっているが、大ざっぱに見ると変化していないように見える。

因である。

(2) 石の質が比較的良いところでは、拓本を取ったために碑面が薄く磨損し、端方旧蔵本では文字の筆画が細めになってはっきり見えるようになったもの、いくぶん細くなったものもある。石花は小さく浅くなる。

(3) また、一部の文字は李鴻裔旧蔵本の時すでに不明瞭であったが、碑面が研磨され、そののちの端方旧蔵本になると、筆画が明晰になり、文字がかえってはっきりしたものもある。

(4) 特別な状況である。すなわち、李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本に至り(1)・(2)の変化が一文字の中に生じ、太くなった筆画も細くなった筆画もある場合である。甚だしい場合には、一筆画の中に太くなったところと細くなったところがある。これについては、人為的な抉剔がなされた可能性もある。

時間の推移に従い、石碑の文字は太くなったり細くなったり変化するが、これは、ある人物が言うように「新しい碑は拓本を取り始めた後に太くなり、それから細くなる」のではない。

李鴻裔旧蔵本から端方旧蔵本への過程で、筆画が太くなったり細くなったりしているが、これには二つの原因がある。

- ① 長い間絶えず拓本が取られたので、表面が磨損して文字の彫りが浅くなり、筆画が細くなった。
- ② 一部の石質の風化による。碑石は各部分によって質や構造が完全に同じではなく、風化の程度やまた風化に対する耐久性も異なるので、各部分の変化も一様ではない。

一般に石質の良いところ、また風化されていないところでは、筆画が細くなった状態で保たれている。しかし、風化を受けたところでは、石質がもろくなったことにより、文字の彫りが同様に浅くなったが、もとの状態が保てず、文字の刻んだ部分が大きくなり、筆画が太くなった。細くなったり太くなったりという変化は拓本を取る過程で同時に存在し、細くなったものは最

後に文字が細い線となり、太くなったものは最後にはっきりしなくなって識別できなくなり、拓本を取る価値が失われる。

つまり、各文字はそれぞれに細くなったり太くなったり異なる変化をしており、甚だしい場合には一文字の各部分、一筆画の上下左右にも同様な変化が生じているのだが、その原因を知れば、結果を鑑賞することができるものである。

あ と が き

李鴻裔旧蔵本と端方旧蔵本に対する研究を通して、以下の点についてさらに述べてみたい。

(1) 拓本の各時代における石花を熟知していると、拓本を判断する重要な根拠になる。たとえば、『九成宮醴泉銘』碑の原石の「本乏水」(19頁)三文字の周囲にはいくつかの大きな石花があるが、数種類の翻刻の拓本にはそれらの石花がない。

(2) 『九成宮醴泉銘』碑の上部の大きな横の亀裂もこの碑の特徴である。この亀裂は全碑の24行を貫通し、つながっている。表装された後も、一行ごとにその亀裂の連続性が見られる。もしそれが連続していないなら、その拓本には問題があり、もとの石原碑から取られたものではないかもしれない。

(3) 多くの拓本において破損している文字について、無錫秦氏の模刻を李鴻裔旧蔵本と対比してみると、無錫秦氏のものは李鴻裔旧蔵本より破損が少ない。このことは、無錫秦氏の母本(祖本)が李鴻裔旧蔵本より古いことを物語っている。残念なのは、それがどこにあるかわからないことである。汪士鋐は岳雪楼醴泉銘の跋で、完全な拓本を見たと記している。また清末から民国初期のころ、もし収蔵家が明代の拓本を得られたならよい拓本と考え、「櫛という文字が破損していない拓本」が得られたなら世に稀なものであるとみなした。光緒年間に、ある人が純銀五千両で当時第一とされていた「重と

いう文字が破損していない拓本」を買おうとしたが、ついには得られなかったという。さまざまな原因により「収集家がすばらしい拓本を入手すると、大方奥深くしまいこみ、秘密にして人に見せないのも、一般に外の人³⁾が知るものは甚だ少なかった」のである。将来、我々の目を楽しませるさらに良い拓本が出現することを願ってやまない。

注

- 1) 原本は三井文庫収蔵，二玄社，1991年3月15日第1版発行。
- 2) 原本は三井文庫収蔵，二玄社，1987年11月10日第1版発行。
- 3) 張彦生「九成宮醴泉銘碑拓本略述」，中国文物編集委員会編 月刊『文物』1980年第4期総287号，57頁。